

# 「女性運動」の奪還——生活 の主体として抑圧に対峙する 立場性の再定位

村上 潔 2012/11/25

社会文化学会第15回全国大会

於：デザイン・クリエイティブセンター  
神戸（旧国立生糸検査所）

# ■“「女性運動」の奪還”というテーマ

- ▶ 主体は誰か
- ▶ 主体はどう評価されてきたのか
  - 社会から／フェミニズムから(として)
- ▶ どこに立ち戻らざるをえないのか
- ▶ 古くて新しい価値とは何か

# ■「ママ」の運動-1

## ▶〈大阪おかんの会〉：“おかんたちの会”

### 大阪おかんの会のブログ

「愛」でガレキを止めたいのです。

「愛」で放射能から守りたいのです。

関西の子どもたちを放射能から守るために  
立ちあがったおかんたちの会です。

大阪を守り、西日本を守ることが日本を救う道。  
子どもたちの未来を守ろう！

# ■「ママ」の運動-2

## ▶〈大阪おかんの会〉：“独身女性を中心とした会”



「大阪市における災害ガレキの受け入れに関する公開質問状」(11/16環境局へ提出)

2012年11月17日(土) 12時59分47秒 posted by osakaokan2012

テーマ:資料

平成24年11月16日

大阪市長 橋下 徹 殿

「大阪おかんの会」

(公印省略)

### 大阪市における災害ガレキの受け入れに関する公開質問状

私たち、「大阪おかんの会」は、大阪市ならびに近隣市在住で、仕事も頑張りながら、子育て中の母親・結婚を視野に入れた独身女性を中心とした会です。今回、大阪市が推し進めようとしている災害ガレキの受け入れに関して、遅ればせながら、先月にその情報を知りました。被災地で体験された方々の話を聴き、独自の勉強を続ける中、安全性に関する懸念とともに被災地から遠く離れたこの地で受け入

## ■「ママ」の運動-3

- ▶「柏ママの放射線だより。」  
〔ブログ(現在閉鎖中)〕

《1人の子どもがいる主婦のつぶやきです。ママ目線で考えます。》(トップページ)

◎高度な活動

市の情報収集＋放射線量独自計測→公開

## ■「ママ」の運動-4

### ◎水島希の指摘

« 「教育も受けていない母親が子どもを守るために行動している」というイメージは、当事者が使うと有利に働く場合もあるかもしれない。しかし実態としては、放射線情報を読みこなし、測定器の特性を理解した上で数値を集約、公表するといった科学的判断力や行動力に満ちた女性層が、「母親運動」の一部を確実に担っているのである。» (水島 2011: 22)

## ■「ママ」の運動-5

≪母親運動は「母性」と関連付けて描かれることがよくあるが、国の政策どころか家庭内にあっても、女性が科学に関する意思決定に関われないことへの反発や不信が、「母親運動」の大きな原動力になっているのではないか。だとすれば、「母親であることを強調しているからといってその運動を否定するのではなく、非専門家であり市民である「母親」が、「母親」(あるいは女性)であることによってどのように意思決定過程から阻害【ママ】されているのかを丁寧に見ていく必要がある。≫ (水島 2011: 23)

# ■ 母親たち-0

- ▶ 疎外
- ▶ 周縁
- ▶ 非主流＝マイナー
- ▶ 非生産的(とされている)
- ▶ 政治的価値の外(とされている)



# ■ 母親たち-1

## ◎ 矢部史郎の指摘

◀ 国内難民となった人の多くは子供をもつ母親たちです。私は名古屋に移住してから、食品や土壌の放射能を測定する「市民測定所運動」に加わったのですが、[...]、その測定運動で出会うのが、子供をもつ主婦たちです。 [...]

彼女たちは知っているんですよ。自分たちがマイナーな存在であることを。

自分たちがどんなに正しいことを言っても誰にもまともな相手にはしてもらえない。頭のおかしい、それこそ「パニック」を起こした人間としか扱われないだろうと。

≫ ↓

## ■ 母親たち-2

《 男性社会や企業社会のメジャー(ものさし)から、あらかじめ排除されたものとして、はじめからメジャーの外にあるということを知っている。そして、自分たちが主張していたことの正しさが後になって証明されても、誰にも感謝されず、誰からも謝罪をされないということまで知っている。

さらに、メジャーがとりこぼしたものによって今後引き起こされる、さまざまな事態の尻ぬぐいをさせられるのが自分たちだということまで知っている。スーパーで食品を吟味することから、具合の悪い子どもを病院に連れていくことまで、結局自分たちにツケがまわってくることを、経験的に理解しているのです。》(矢部 2012: 43-44)

# ■マイナーとしての主婦

- ▶ 政治や産業社会のツケを払わされる。

しかし／そこで反対に.....(↓ LeBlanc 1999=2012)

- ▶ 「政治」への参入を拒否し、「主婦らしい」運動をつくる。
- ▶ 主婦アイデンティティの逆説的政治性
- ▶ 「私的」であることを突き詰めることで生まれる公共性
- ▶ 生活世界に生きる「生活者」という立ち位置  
(生協運動／環境運動／平和運動／PTA／ボランティア.....)

# ■何に依拠するのか——生活と再生産

- ▶ 既存の「社会」は(自分や子どもの)「生活」を守らない  
→ 自衛(とそれにともなう「政治」)

## ◎気づき

- ▶ ≪生活という当たり前の営みが、当たり前のこととして成り立つことの困難を実感するとき、人ははじめて、いったい自分が生きている生活がどのようなものであるかを捉えたいと思うようになる。それは、生活がじつは脆弱で、存続させていくのがむずかしい組織体であるということが、納得できる瞬間であるといってもいいだろう。そのとき生活は、真剣に考察すべき対象となる。≫ (篠原 2012: 14)

# ■「全体性」の回復-1

## ◎篠原雅武の指摘

《 全体性とは、生活という組織体を織り成すさまざまなないとなみを、集め、関係づけ、出合わせ、織り成していく作用であり、はたらきのことだ。こうした意味での全体性があるのはじめて、生活は、組織体となり、存続可能なものとなる。

何か壊れ、狂い、荒廃がすすむ時代状況においては、この全体性をなんらかのやり方で取り戻すことが、喫緊の課題になるだろう。》↓

## ■「全体性」の回復-2

《その崩壊において、ひそやかに、だが着実に現れつつある何ものかの断片を関係づけ、織り成していくための全体性は、これから新たに発案し、創出していかなくてはならないたぐいのものだ。それは、……表向き明るさを装わされつつ束ねられ硬化と停滞を強いられている生活を解きほぐすところに、回復され、蘇生することになるだろう。》(篠原 2012: 26-27)

# ■再生産を担うこと／その存在

## ◎松本麻里の指摘

《強調したいのは、なにより親という存在は、育児労働・家事労働などの再生産労働者でもあるという点です。原発事故後、再生産労働の時間と責務がものすごく増えています。[...]安全な食事をたべさせたいと思えば、食材の調達に時間がかかる。原子力国家がもたらした、「労働」強化の問題でないかと思えます。そうした再生産労働の小さな変化、小さな日々の積みかさねを無視して、理論だけを積み重ねるフェミニズムは一体、誰を救おうとして、誰と連帯しようとしているのかな？とも思います。》(松本 2011)

# ■“女の運動”とは

- ▶ 生命を守る、生活を守る。【(自己)防衛】
- ▶ 再生産領域を基軸にした世界秩序の構築  
——「メジャー化」するのではなく「全体化」する。
- ▶ 生命・生活を侵す、産業社会とそれを形成する「政治」  
に対抗する。  
→ 自らの活動の価値を発現させる場／空間を作る——  
別の「政治」を作る。(計測運動の「ママ」たちの例)



# ■“女の運動”の連続と段階-1

## ◎矢部史郎の指摘

《 歴史は繰り返すというか、よく思い出してみれば、五〇年代の原水爆実験反対運動も、チェルノブイリ事件に発する八〇年代後半の反原発運動も、その中核を担ったのは女性たちでした。反核運動というのはずっと一貫して、素人の、女の、運動だったんです。いまそれがかつてない規模で始まった。》↓

## ■“女の運動”の連続と段階-2

《 「三・一ニ」のインパクトはここにあると思います。

まず大規模な離散が始まり、女性たちを収容していた「社会」が、メルトスルーしてしまう。もう誰も彼女たちを統制することはできない。そして、漏出していく分子はてんでにチェーンリアクションを起こして、潜在する知性を解放していく。

これは日本の歴史上かつてない、ラディカルなデモクラシーが始まるということです。》(矢部 2012: 48-49)

# ■「母親たち」とフェミニズム-1

## ◎松本麻里の指摘

《原発事故後、日本社会のフェミニズムは大きな反省と転換を強いられているのではないかと思います。これまで日本のフェミニズムでも主流であった「社会構築主義」や「本質主義批判」では説明しきれない現状が目の前に展開されている。少なくともここ20年、ずっとフェミニズムに関わりながら、いままで「親たち」とりわけ「母親たち」がこんなに積極的に動いている現場にたちあったことはありませんでした。これは今まで私が体験したことのない事態です。理屈がなくても、論理がなくても、それこそフェミニズムがなくても、女性たちや母親たちが立ち上がる。》(松本 2011)

# ■「母親たち」とフェミニズム-2

## ◎ルブランの指摘

《もし女性が、あらゆるジェンダー役割のうち最も「私的なもの」を生かして、公的な場での声を得る活動やある種の「女性たちの連帯意識」を得られるとしたら、私たちはフェミニストの政治分析における〔性別役割分業の解消という〕目的をどう理解すべきなのか。さらには、それをどう再検討すべきなのか。》(LeBlanc 1999=2012: 233)

# ■女性運動としての流れ

- ▶ ①性役割(母・主婦)に依拠した女性運動
  - ▶ ②それを乗り越える取り組み(能力主義的な政治・産業へのアプローチ)
- ↓
- ▶ ③——①の潜在的な力の源泉を見定める。②の「戦利品」の中身を吟味する。——ところから始まる。
  - ▶ 何を活かすのか。何を捨てるのか。

# ■ 知的な価値の転換から富へ

## ◎ シヴァの指摘

《 女たちのエコロジー運動が引き起こしている考え方の転換は経済的な価値と知的な価値にかかわっている。一つは知識を構成するのが何であり、知的な価値を知り生産するのは誰かということだ。もう一つは富と経済価値の概念にかかわるもので、誰が富と経済価値の生産者かということである。生存【サバイバル】を生む女たちがわれわれに示しているのは、自然こそ生命維持の機能のゆえに経済生活の基盤であり、これまで「荒蕪地 (waste)」とされてきた自然の要素は貧しき者や周縁に追いやられた人びとにとって持続可能性と富の基礎であるということである。》 (Shiva 1988=1994: 239)

# ■ 自然や世界そのものとの新しい関係

## ◎ ヴェールホフの指摘

《 わたしたちが歩んできた道がまったく間違っていたのだ。産業システムからの出口はたった一つ、真のオルタナティブしかない。賃労働や別の形態の商品生産ではなく、それらから解放されたサブシステムである。この扉から覗いてみれば、何か別の世界が見える。わたしたちはあるパースペクティブを手に入れる。産業社会の穴蔵、監獄から出た道はシステムの外の【傍点：自由の天地】へ通じている。システムのない所、自由の天地へ。なぜなら自然や世界そのものとの新しい関係、【傍点：自由】との今までとは違う関係を意味しているからだ。》 (Werlhof 1991=2004: 197)

# ■ 論点-1

- ▶ サブシステム(生命維持)／再生産
- ▶ 周縁
- ▶ 私的
- ▶ 「(産業)社会」・「政治」からの脱出
- ↓
- ▶ (奪還する)自然・土地
- ▶ (現出する)知・富



## ■ 論点-2

- ▶ 「生活者」はつねに、それが使われる時点において、既存のシステムのオルタナティブ／カウンターとして設定され、機能してきた。
- ▶ その普遍的な「更新性」は、現在の女性運動にも適用されうる。
- ▶ 一見「保守的」「固定的」な外見をまとった女性運動を読み解く際、いまなおもっとも有効な切り口。
- ▶ その内実の多様化・拡散こそが生命線。

# ■ 結論-1

- ▶ 周縁の労働＝再生産領域の「価値」を手放さないこと。
- ▶ その「資源」を——都市に、周縁地に——獲得すること。
- ▶ 主婦・母親は、「地域の生活者」と同時に、「自然／資源の管理者／保護者」でもある。
- ▶ その主体性を獲得する＝取り戻すこと。 ★「(放射能からの)避難」
- ▶ 私的でしかありえないがゆえに生まれる公共性と、「政治」を拒否する《主婦性》を拠り所にすることによって生まれる政治にこだわる。【女性運動の普遍的基点】
- ▶ 篠原の言う「全体性」の回復と、「女性運動の奪還」は、内実的にかなりオーヴァーラップすることになる。——では、フェミニズムによる／としての位置づけは？……

# 結論-2

## ◎展望

- ▶ エコ・フェミニズムの再定位
- ▶ リプロダクティブ・ヘルス／ライツをめぐる問題提起の拡張化【生命維持・再生産】
- ▶ 自治体の枠組みを生かした活動単位の構築
- ▶ 空間性——土地の獲得／場所の転用——の重要度
- ▶ 運動の歴史性・連続性
- ▶ 運動の持続可能性——主体の分散性と点在性をこそ重視し、組織論を捉え直すこと。

# ■文献-1

- ▶ 天野正子, 1996, 『「生活者」とはだれか』, 中央公論社.
- ▶ LeBlanc, Robin M, 1999, *Bicycle Citizens: The Political World of the Japanese Housewife*, University of California Press. (=2012, 尾内隆之訳『バイシクル・シティズン——「政治」を拒否する日本の主婦』勁草書房.)
- ▶ 松本麻里, 2011, 「原発と再生産労働——フェミニズムの課題」, *Japan - Fissures in the Planetary Apparatus*, (2012年7月25日取得, <http://www.jfissures.org/2011/11/28/nuclear-energy-and-reproductive-labor-%E2%80%93-the-task-of-feminism/>).
- ▶ 水島希, 2011, 「技術と知をわたしたちの手にとりもどす——原発事故後の放射線対策と女性」, 『女たちの21世紀』67(2011-09): 19-23.

## ■文献-2

- ▶ 篠原雅武, 2012, 『全-生活論——転形期の公共空間』以文社.
- ▶ Shiva, Vandana, 1988, *Staying Alive: Women, Ecology, and Survival in india*, Kali for Women. (= 1994, 熊崎実訳『生きる喜び——イデオロギーとしての近代科学批判』築地書館.)
- ▶ Werlhof, Claudia von, 1991, *Was Haben die H[u]hner mit dem Dollar zu tun?: Frauen und O[k]onomie*, M[u]nchen: Verlag Frauenoffensive. (= 2004, 伊藤明子訳『女性と経済』日本経済評論社.)
- ▶ 矢部史郎, 2012, 『3・12の思想』以文社.

## (参考)

- ▶ 村上潔, 2010, 「「主婦性」は切り捨てられない——女性の労働と生活の桎梏にあえて向き合う」, 『生存学』02:83-95 (生活書院)
- ▶ 村上潔, 2012, 『主婦と労働のもつれ——その争点と運動』, 洛北出版
- ▶ 村上潔, 2013, 「女の領地戦——始原の資源を取り戻す」, 『生存学』06 (生活書院)